

道心



禅昌寺通信「道心」第17号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室
発行 平成17年5月1日
〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7
TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822
E-mail : zenshoji@bronze.ocn.ne.jp
ホームページ http://www.zenshoji.org/

「心が心にこだまする生き方」

住職 横山 正賢

宗門に「正法眼蔵随聞記」という私たち曹洞宗の僧侶であれば誰もが生き方や修行の拠り所としている宗祖道元禅師の弟子孤雲懷奘（永平寺二祖）様の遺された著書があります。

道元禅師ご在世の時、禅師のおそばにいて身の回りのお世話をされていて、常日頃の修行や生活の中で、お師匠様の言われることを、聞くに随ってメモ的に記述されたものですから「随聞記」というわけです。

その中に「学道の用心は和敬同心にあり」とご教示があります。紙面の関係でいきなり読み下して記しますと、「在家の人でさえ、家を保ち、城を守るのに、心を一つにしないと、ついには亡びてしまふと言っている。ましてや、出家の仏弟子は、一人の師匠のもとで、水と乳がとけ合ったようなものである。また、六和敬という法もある。めいめいが個人の部屋を持って、心もからだも互いにへだてて、各自思い思いに仏道を学ぼうと心がけてはならない。一師のもとでの学道は、

一つの船に乗って海を渡るようなものである。心を同じくし、行、住、坐、臥を同じくし互いに悪いところは注意しあい、よいところはとりあつて、同じように仏道を学ぶべきである。これが仏在世の当時から行ってきたやり方である（水野弥穂子訳）とあります。

この中にある六和敬というのは、僧は和合を義とすることが求められますが、和合には理和合という理性的和合と、事和合という形や行動に表れる和合が、慈念の心を持って身と口と意によって行われることであります。

このご教示は仏道修行の用心に止まらず、私たちの日常生活におきましても大事なことと考えます。

自由・平等という考えを基に戦後六十年が過ぎましたが、今の日本社会が抱えている、政治不信・産業界の失墜・教育不審・家庭崩壊と嘆かれるものには、自我を中心とした自由・平等の思考が生み出した結果ではなからうかと危惧されるとき、此処に示された六和敬は、宗派を問わず仏教の個（己・自分・もの）のありようを、一即一切・一切即一として存在する中で生き方や考え方を教示される

ているのです。言い換えると、「己は自然や社会によって存在し・自然や社会は己の責任のもとにある」と示唆しているのです。

いま地球温暖化現象とか自然破壊とか言われることも自然環境を無視した人間に取って都合の良い身勝手な行為が生み出したことではないでしょうか。自由ということとはこうした自然環境とか社会という関わりの中で許されることですし、平等とは上も下もなく平らにという次元ではなく、森羅万象に包まれて存在する全てが、自然界も人間も平等に得難き尊い命を戴いていることを、敬つて自覚しなければいけないように思います。万物融合・自他和合の思いやりや気配りが大切に思います。

我が家も副住職夫婦は渡米して十二年、孫達は米国生まれの米国育ちの家族が三月に帰国しました。三世代同居となつて一番苦勞をするのは嫁であらうと、家内と私は話し合つて「嫁さんが苦勞なく、やりやすいようにしてあげようや！」「そうしましょう！」と家内の快諾を得て、四月一日「家計と家事一切の切り盛りを引き渡します」（お寺のことは別）と引き渡し式をしました。

帰国して一カ月も経たない内に責任を押しつけられた嫁さんこそ、かえって氣遣うのではなからうかと思ひます。家の個々別々が一つになる気配りが、互いを活かし合い、和敬同心の基となることを祈ります。

第12話



何が幸せかを 選んで生きる目の深さを 養ってください

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

山のあなたの空遠く

さいわい住むと人のいう

あわれ人とめゆきて

涙さしぐみ帰きぬ

山のあなたのなお遠く

さいわい住むと人のいう

若き日の私は多少の感傷も含みながら、カール・ブッセ（ドイツの詩人）のこの詩を愛唱したものでした。

「さいわい」という言葉の、つまり「しあわせ」という言葉の何と魅惑的なことでしょう。人ははるか古代の昔より、この「しあわせ」を求めている旅を続けてきたような気がしてなりません。

しかし問題は「しあわせ」の中身です。何を求めて「しあわせ」とするのでしょいか。人によってみんな中身が違います。

「名声も財宝も少しも羨ましくはない」

お釈迦さまのお弟子さんにピンズル尊者（そんじや）というお方がおられました。日本のお寺では須弥壇（しゆみだん）（お寺の本堂の仏さまの座る壇）の上にはお登りにならず、本堂の入口などにお祠（まつ）りしてあり、「おピンズルさま」と呼び親しまれている仏さまです。このピンズル尊者にウダエンという幼馴染（おきななじ）みがいしました。ピンズル尊者は出家し、お釈迦さまの弟子となつて諸国で修行されましたが一方のウダエンはコーサーミという国の王となつて権勢（けんせい）をほしいままにしておりました。

ある時、ピンズル尊者が托鉢（たくはつ）をしながら故郷を訪れ、林の中で坐禅をしておられると部下から伝え聞いたウダエン王は大勢の家来や美しく着飾った女官たちをひき連れ、装いをこらし、林を訪ねます。ぼろぼろのお袈裟（けさ）をまとい、樹の下で坐禅をしておられるピンズル尊者を見つけたウダエン王は胸を張つてこう言いました。「私は今、諸国を征服し、その勢いたるや天の太陽をもしのぐものがある。高価な宝石や衣装を身にまとい、多くの家来や美しい女たちにかしづかれています。どうだ、羨ましくないか」尊者は穏やかなお顔で幼馴染みの王を見上げて、たつた一言だけ答えました。「われに羨心（せんしん）なし」「羨（せん）」とは「羨望（せんぼう）」の羨で羨ましいという意味。つまり「少しも羨ましくないよ」とおっしゃったのです。ピンズル尊者もウダエン王もしあわせを求めていることに変わりはないのですが、そのしあわせの中身に天と地の開きがあるようです。

ルソーは『エミール』の中で、「人間は誰でも王者であろうと貴族であろうと大富豪であろうと、生まれる時には裸で貧しく生まれて来、そして死ぬ時にも、裸で貧しく死んでゆかなければならない。このしばらくの中間をさまざまの着物を着る。女王のような華やかな着物、乞食という衣装、僧服、金持ち、美人、さらには主義とか自惚（うぬぼ）れとか劣等感とか。すべて衣装。ほとんどの人がこの衣装にばかり目を奪われて、一生を終わる。すべてを脱ぎ捨てて裸の私自身をどうするかを全く忘れてしまっている……」と語っています。

扱べない私、扱んで生きる私

裸で生まれ裸で死んでゆく、そのしばらくのあいだ。小さい時はガラガラがらんぐらの玩具おもちゃぐらいで満足していたものが成人に達するほどに自動車くるまが欲しくなる、異性いせいが欲しくなる、名誉めいよが欲しくなる……

年とともに欲しくなるものが変わり、それを手に入れるために血眼ちまなこになり、手に入れたといって酔っぱらいのぼせあがります。逆に失ったといって死にたくなるほどに落ち込んだりしながら一生を終えてゆく。衣装や持ち物にのみ心を奪われ、持ち主である私、衣装の着手である私自身をどうしたらよいか、などということは思いつきもしないままに。重い病いの宣告を受けることにより、あるいは死の床にあつて人は初めてそれらのすべてがうたかたのしあわせに過ぎなかったことに遅ればせながら気がつくのです。

金を積み上げたら命を買い取るか？ 肩書を並べたら癌がんは遠慮してくれるか？ 親が、妻が、夫が、子供が、何とか代わることはできないかと願ってみても代わることも助けられないかもしれません。たとえ医学がどんなに発達しようと、たとえ臓器移植をしようとすれば死んでゆく命。死から免れることはできない私の命なのです。一日も早く気づき、一日も早く問わねばならないことはグッチやプラダのハンドバッグやプラダポルテの高い衣装ではなくその持ち主、その着手の私自身のそれも明日ではない、今日をただいまをどう生きたらよいか、どう生きることが真のしあわせかを問うことなのです。

人生には2つの姿があると思います。たとえば色が黒いか鼻筋がきれいとかの自分では扱ぶこととの許されない、授かりとしていただくより仕方のない一面と、冷厳れいげんな目で扱さび抜ぬかねばならない一面とがあります。

親は子を扱さぶことができず、子は親を扱さぶことはできません。自業自得と言われても仕様のないような、自ら招いた病気とか事故ということも時にはありましようが降つて湧いたような形で災難に出遭でうこともあります。そういう時は逃げず愚痴ぐちらず、本腰を入れて受けて立ち、”さいわいに”と転じていこうじゃないかということは前にお話した通りです。

「智慧」を訳せば『簡扱断疑』

もう一つの姿は選えらび抜ぬいてゆく世界です。人生はしあわせを求めての旅であり、さらには何をもつてしあわせとするか、何をこそ価値あるものとするかの目の深さ、確かさによつてその人の人生が決まつてゆくような気がしてなりません。着るものを何にしようか、持ち物をどれにしようか、何を食たべようか、から始まり妻や夫となるべき人を扱さぶに至るまで扱さぶにもいろいろあります。

まず何よりもきつちりと押さえておかねばならないこと、扱さび分けておかねばならないことは持ち物でない、衣装ではない、私の外側の話ではない、私自身をどうするか、どう生きたらしあわせなのか、を問うという方向に生きる姿勢を決めるということです。たった一度のそれもやり直しの

できない私の人生を私の命を何にかけるか。大は私の人生そのものをかける対象を扱さぶことから始まり、小は今日一日をどう生きるか、今の一言を私の感情の趣くままに言い放つか”待てよ”としばしブレーキをかけて、言うべきことを言うか否かに至るまで人は常に選えらびの岐路きろに立たされていると言つてよいでしょう。仏教でいう「智慧」という言葉は「簡扱断疑」と訳されています。「扱」は選えらびの「扱さぶ」、「簡」は「もつと扱さぶ」という意味です。何を扱さぶのか、何が真で何が偽か、何がより価値あることで何がつまらないことか、何が正しくて何が間違いか、徹底的に扱さび抜ぬいて間違いないと疑いを断ずる、その働きを智慧と呼ぶのだと言つのです。

ただ物知りになる知識の詰め込みとは次元が違い、方向が違ふことは改めて言うまでもありません。

この智慧を育てる、扱さぶ目を育てるためにはよき師、よき友、よき教えに従つて学ばねばならず、よき師、よき友、よき教えを扱さぶのにまた扱さぶ目の確かさが問われる。扱さぶ目のないものにとつて何ともやるせないことはありません。しかし切なる願いに導かれ、二度とない人生を悔いのないものにするべく中途半端ではなくほんとうのしあわせなものにするべく、扱さびに扱さんでいきたいものと思つことです。

※ 本文は、青山俊重尼老師著

「悲しみはあした花咲く」 光文社より抜粋したものです。

曹洞宗海外布教の現況

副住職 横山 泰賢



ニューヨーク州禅マウンテンモナストリー・道真寺にて、道元庵(山小屋)の落慶式

曹洞宗の国際布教は一九〇三(明治三六)年ハワイにおける曹洞宗布哇同胞慰問使による布教活動が契機となつて、一八六八(明治元)年以来、日本からハワイへ移民した人々を対象に行われました。その後一九〇八(明治四二)年には南米ペルー、一九一七(明治四四)年北アメリカ、一九六七(昭和四二)年ヨーロッパと順次布教活動が始まりました。しか

し一九五〇年代後半から一九六〇年代にかけて、欧米社会においていわゆるビート・ジェナレーションといわれる人々が、産業革命以来、世界的に共有されてきた物質文明発展を中心とした価値観に疑問を感じ、アジアの文化、宗教を求めるようになりました。その結果、日本からの移民だけを対象とするのではなく、欧米人を対象とした坐禅修行中心の布教が欧米各地ではじまりました。

こうして曹洞宗の国際布教も百年が経過し、現在曹洞宗の国際布教の拠点となる海外寺院、禅道場、禅センターは六十六ヶ寺に及び、曹洞宗から世界各地に派遣されている国際布教師は四十八名、また海外で僧侶として育ち国際布教に携る伝道教師が欧米に三十二名おり、仏法の興隆と敷衍に日々精進されております。

このような状況の中、私は一九九三年五月に妻と共に渡米し、最初の四年間は、ニューヨーク、ミネソタ、アイオワ州にて布教活動

の一端を担い、一九九七年六月以来、曹洞宗北アメリカ国際布教総監部にて、北アメリカで布教活動に従事する皆様のお世話をさせて頂き、同時に曹洞宗国際センターの主事として、曹洞宗の海外と日本の橋渡し役を務めてまいりました。この間、一九九三年十一月長女「歩」がニューヨーク州で誕生、一九九六年二月長男「泰寛」がアイオワ州で誕生しました。滞米生活十二年でありましたが、この平成十七年三月三十一日を以つて、北アメリカ国際布教師並びに、曹洞宗国際センター主事を辞任し、家族揃つて禅昌寺に戻つて参りました。この十二年の間には苦しく辛いこともあり、また楽しい思い出も沢山出来ました。家族四人大過なく無事に帰国出来ましたのも、禅昌寺及び檀信徒の皆様のご支援と、諸先輩のご教導ご鞭撻、方丈・母・宗賢師を始め皆様のご協力の賜と心から感謝いたしております。

また、私が布教活動で留守がちなか中の海外における出産、子育てなど筆舌に尽くせぬ苦勞を掛けた妻淳子にも感謝しております。誠に有り難うございました。

今後は禅昌寺に腰を落着け、

寺門の発展と興隆、檀信徒皆様との交流に力を尽くす所存でありました。しかし、昨年夏より宗門からヨーロッパ国際布教総監部(イタリア共和国ミラノ市)への出向を要請されており、断り続けておりましたが、昨秋曹洞宗門布教活動の責任者である曹洞宗宗務庁教化部長より、禅昌寺住職に私をヨーロッパ国際布教総監部へ、二年間赴任してほしいとの要請があり、方丈は「自ら請うても出来る任務ではない、二年間修行のつもりで宗門の職員として登用され、禅昌寺の多忙な時期は帰山することを条件として宗門に奉仕してはどうか」との示唆があり、私に取りましては大変な重責ではありますが要請を承諾いたしました。

この渡欧に際しましては単身赴任し、益・彼岸等禅昌寺が忙しい時には帰山して、方丈を補佐致します。引き続き皆様のご理解を賜わりますようお願い申し上げます。

また、折角の機会でございますので、皆様も是非一度私の赴任中にイタリアにお越しいただき、曹洞宗の国際布教の現場を垣間見ていただければ幸甚に存じます。

皆様のご健康と万福多幸をお祈り申し上げ失礼致します。 合掌

「出会い」は大切に

庭瀬 恵介

長年お客様との接客に携わっていた関係からも、また人の心が老いてやつと理解し易くなった事もあるのか定年間近頃から特に人との「出会い」について色いろ考えさせられたりする事が多くなりました。この事に関する自身のまとめをしたくなり、ここに記してみます。

「出会い」として広い宇宙の中で人が一生のうち叶えられる人数はせいぜい百人から二百人ではないでしょうか。その中でも真に出会える人となれば十から二十人位だと思えます。その折角の「出会い」をいかに大切にするかと言えば、一人ひとりの出会いについて真正面から向かい合い、その方のいいところを見つけ出しながら一步一步近づいて理解を深め、出来る限り長くつきあうという事ではないでしょうか。ただし、つきあっていく中であまり無理をして、また我慢をして相手の方の言いなりになるなどをして自身にストレスが溜まり不仲になる事もマイナスが大きいと思われまます。出来るだけ無理をせず、「出会い」の初めから

あまり深く相手の心に入り込む事はせず、気楽な気持ちでゆつくりと時間をかけ深めていくのが良いのではないのでしょうか。自分自身の過去の「出会い」の記憶から「出会いの瞬間」から短時間のうちにお互いの仲が深まったと自分勝手に判断し相手の心に入り過ぎ、急に別れにつながったという経験があります。本当に人の感情は同じものさしでは計れないものです。

なぜ「出会い」を大切にすることに考えてみますと、人間一人では何も出来ず日常生活の中にでも家族・友人・知人・又街を歩いていて知らない方等あらゆる方との結びつきで生きております。これも全て「出会い」からくる人生そのものだと考えます。突然一人になった時とか日頃鳴っていた電話が鳴らなくなつた時、時々食事をともにしていた方からのお誘いが無い、又自分自身その様な行動に出ず一人ぼっちで自室に籠る等色々考えてみても「出会い」がないという事は寂しい人生だと思ひます。

忘れてはならない事に「出会い」は人だけでなく、物・自然など目で見える全てが「出会い」です。一生一瞬と思ひ続け、様々な人・物・自然と出会う機会を自ら創るべきです。その事が自分自身の行動や趣味の幅を広げ、しいては人の心を大きくする事にもなるのではないのでしょうか。

最後に人は人間なしでは生きていけない、一生一度しかない人生、一人でも多くの方と出会い、その方の生き方からも多くを学び悔いなく一生を楽しく過ごすことが望ましいと思ひます。

今日からでも遅くはありません是非「出会い」の機会を自らの行動で創つてみてはいかがでしょうか。私は「出会いの瞬間」と「別れの瞬間」を大切にしてきました。これからもこの瞬間を大切に人生歩み続けてみます。皆様も考えてみて下さい。

※「出会い」を長く続けるポイント

一つ、相手の気持ちになり少しでも喜んでもらえる気遣いの心を持つ

二つ、相手に嫌われない配慮として常に心身の清潔を心がける

書道家の相田みつをの詞に「めぐ

りあい」があります。ご紹介いたします。

合掌

「めぐりあい」

あなたに

めぐりあえて

ほんとうによかった

ひとりでもいい

ころから

そういつてくれる

ひとがあれば

仏様

仏様はみんなみんな私の為

つらい想いをしなければならぬ

私の為

嫌な想いをしなければならぬ

私の為

怒り苦しまなければならぬ私の為

さびしい想いをしなければならぬ

私の為

そして病んで必ず死んでいかなければ

ならない私の為

そんな私の為に助かってくれよとの

願いも私の為

たくさんの方の御修行、

御足労も私の為

仏様は私が幸福になるように

幸福になる事だけを願って下さる

丁度私の親のよう

安佐南区 在岡 弘子

アメリカから 「平和のための地蔵」プロジェクト

オレゴン州 地蔵山 大願寺

「ジャン 澄禪^{ちようぜん} ベイズ師^{べいずし}」のお話し

平和の地蔵の物語（翻訳）



一九四五年八月九日、日本の長崎に原子爆弾が投下されたその日、アメリカ合衆国のシカゴで一人の女の子が生まれました。その子が生まれた日、両親はとても嬉しく思いましたが、同時に広島と長崎で多くの人々が殺されたことを大変悲しみました。その子の祖父はキリスト教の宣教師でしたし、彼女の家族は教会の活動に積極的に関わっていました。しかし、その子は成長するかどうかというわけか或る日本人の禅の老師について学び曹洞禅の僧侶になりました。それはきつと仏縁が働いたからでしょう。そしてその子が生まれた時間に近い時に日本で突然命を落とした多くの人々と何らかのつながりがあったからに違いありません。

彼女の両親は二人とも教師で、すべての国々の人々の間で争いがなくなり、お互いに話を通じあえるようになるための努力をした人たちでした。その女の子が十四歳になった時、一家で日本に旅をしました。台風の子で海がおおしけになり、夜になると船が難破するのではないかと恐れて多くの人々が泣き叫んでいましたが、その子は少しも怖いとは思いませんでした。彼女は日本で屋根のある商店街のアーケードや満開の桜や人々の親切さに魅了されました。この少女は大人になって子供のための医者になりました。やってくる病気の子供達を守ってくれるようにと地蔵菩薩の像が彼女のクリニックに置かれていました。年を重ねていくうちに彼女は長崎を訪ねようと決心しました。広島と長崎の原爆資料館に足を運んだ時、原爆によって殺されたり怪我をした数多くの男や女や子供の苦しみを見て大変心を動かされました。彼女は心の中に確固たる誓願を立てました。それは原爆投下から一

年のうちに亡くなったすべての人々にそれぞれ一体の地蔵を届けるといふ誓願です。それは二十七万体的におよぶ平和の地蔵を日本に持つてくるということです！



彼女一人でそれだけの数の地蔵を作ることは到底不可能です。ではどうすればこの誓願を完遂することができようか？そのとき素晴らしいことが起こりました。何百人もの人々がこのプロジェクトのことを聞きつけたのです。多くの人たちが平和のために何かをしたいと願い、平和の願いを日本にもたらしたいと思ったのです。彼らは平和の地蔵を作るのを手伝いたいと申し出ました。

アメリカのあらゆる州、日本、ヨーロッパ、東アフリカ、中央アメリカ、チベット、そして世界中

の他の場所にいる人々の手によって無数の地蔵が作られました。布に描かれた色鮮やかな地蔵、粘土の地蔵、地蔵の人形、繋げられた折り紙地蔵……。芸術家、子供、教師、ビジネスマン……あらゆる種類の人々がこの努力に参加しました。

原爆によって殺されたすべての人々のことを思う時、彼らは悲しみに沈みました。けれども地蔵を作るとき、世界が平和になるようにという沈黙の祈りを心から送りだしました。彼らの心は次第に鎮まっていきました。ある禅の老師が言いました。「わたしたちがほんの少しでも平和になれば、全宇宙がほんの少しだけ平和になるのです」と。平和は一人一人の心の中から始まります。それだからこそ私達ひとり一人が世界の平和のために働くことができるのです。

あの少女はいまや成熟した女性（六十歳？）となり一人、これらすべてのことが彼女の人生において起こったことを、光栄にそしてうれしく思っています。戦争によって引き起こされた苦しみを忘れ去ることはできませんが、傷を癒すために一緒に努力することは可能です。そしてお互いに助け合って世界の平和を願うこともできるのです。二十七万体的平和の地蔵が実現し解き放たれました。

それらがすべての人に功德をもたらしますように……。

お知らせとお願い

巡礼者受け入れ！

アメリカから「平和のための地蔵」プロジェクト
巡礼者一行三十五名は七月三十日京都に入り広島へ

八月二日

十三時二四分広島駅着後、原爆資料館・平和記念公園を視察の後、禅昌寺へ十七時着、十九時から夕食

四日

終日市内及び宮島観光（禅昌寺泊）

五日

市内近郊地蔵寺院を巡拝（禅昌寺泊）

六日

七時禅昌寺出発、平和公園・平和記念式典に参加、引き続き平和記念公園周辺にて「平和のための地蔵」プロジェクトの啓発やパネル展示、十九時より供養塔前の曹洞宗の慰霊法要に参加（禅昌寺泊）

七日

九時半禅昌寺出発、長崎へ

在広中は禅昌寺へ投宿されます。八月三日の夕食のお世話をしなければなりません。合わせて交流会も致したく考えております。炊事のお手伝いのみでも、交流会のみでもけっこうです、ご奉仕いただけるお方がありましたら、是非ご協力をお願いいたします。詳細につきましては改めてご連絡いたします。



プロジェクトを推進するジャン澄禅ベイズ師



「平和のための地蔵」プロジェクト概要

趣旨

このプロジェクトは、広島と長崎への原爆投下60周年にあたる2005年8月に、10万8千体の地蔵菩薩の像を両市にお届けし、展示、寄贈することを希望しています。心をこめてこれらの像を制作するのは、子供や服役員も含む米国の多数の人々です。関係の皆さまのご協力をお願い申し上げます。

機縁

アメリカからの「平和のための地蔵」プロジェクトの代表者は、医師で禅の指導者でもあるジャン澄禅ベイズです。澄禅は、1945年8月9日に生まれました。両親は第二次世界大戦中に平和主義者だったので、長崎に原爆が投下されたこの日は両親にとって悲しみと、娘が生まれた喜びが入り混じった日でした。澄禅は、自分が日本の伝統を継ぐ仏教徒になったのは生まれたときに日本で多くの方々が無暗命を失われたことにつながりがあると信じています。

澄禅師は、米国オレゴン州、地蔵山大願寺 (Izuo's Great Vow Zen Monastery) の共同住職を勤めています。この禅道場では、世界平和のための陶製の地蔵菩薩を作っています。2002年9月には、広島市の平和公園を訪れ小さな地蔵像を納めてゆきました。60歳になる2005年の8月、原爆60周年に当たって、平和のための地蔵像の多くを広島と長崎にお納めして亡くなった人々に追悼の意を表したいと念願しています。



形式

地蔵像の一部は、陶製の小さな像や折り紙地蔵を連ねたものです。しかし大部分は小さな布 (25×33センチ) に描き写した絵か押し絵です。そうした布を縫い合わせて大きな垂れ幕 (3×3メートル) を作ります。こうした垂れ幕は、美しく印象的で多くの人々の平和への願いを表現したものになります。それが様々な所で展示されることを希望しております。

◆道心・趣味の会◆

短歌

● 山茶花は思いのままに濃淡の

紅もちぬさびたる庭に

● プランコを大きくくさいる児らのゐて

空舞うその目キラキラ笑ふ

東区 矢野 淑子

俳句

● 会釈して 大マスクの顔 通りすぐ

白木町 岡村 竹畔

● 春の鳶 生死ゆだねし 風に舞ふ

● 少年の 眼差しとなり 蝶の道

廿日市市 伊藤 順二郎

自由律俳句

● 廃仏 毀釈のツケか 悪がはびこる

● また地震 ニッポンが 沈没する

廿日市市 佐藤 歆次

◆行事報告◆(二月～四月)

● 二月二十七日 日曜日

青山俊董老師講演会 九十余名参加

● 三月十九日 土曜日

春彼岸法要・護持会総会 百六十

余名出席

● 三月二十六日(土)～二十七日(日)

四国八十八ヶ所巡拝の旅

四十六番札所～五十九番札所まで三十四名参加

● 三月二十八日(月)～三十一日(木)

新入社員研修会二社三十五名

● 四月四日(月)～七日(木)

新入社員研修会五社 三十七名

◆行事案内◆(五月～七月)

■毎月定例行事

● 上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日を予定 午後二時から

※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加ください。



平成17年の初釜に参加した皆さん

● 御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

◎ 茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合があります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認下さい。

■恒例行事

● お盆前伽藍掃除

七月三十一日(日)

午前十時よりお昼まで

お昼お素麺を用意しております。

お知らせ

趣味の会として登山・日帰り旅行など企画してりましたが、この所四国八十八ヶ所霊場巡りを実施している関係で住職の日程に余裕がありません。来春四月で霊場巡りは終わる予定です、その後改めて企画したいと考えております。



前回の四国八十八ヶ所巡拝の旅 (第五十一番札所石手寺)

四国八十八ヶ所 ご巡拝の旅(二泊二日)



● 日時 五月二十一日(土)～二十二日(日)

● 行き先 第六十番札所 横峰寺～第七十三番札所 出釈迦寺

● 集合場所時間 五月二十一日 午前六時五十分 広島駅新幹線口に集合、七時出発。

● 帰着は翌日 午後八時半広島駅新幹線口を予定。

● 参加費 一人 二万五千円程度 (納経帳・軸・白衣は別途必要)

※旅行の参加申込み・お問い合わせはお寺までお知らせ下さい(詳しいご案内をお送りします。)

申込み期限 五月十日

電話 〇八二二三九〇六一八

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。次号原稿締切は、六月末日までをお願いします。